

# 汝自身を知れ

## 終つばさ

有名な格言「汝自身を知れ」は、古代ギリシャが舞台であるデルフォイのアポロン神殿に刻まれていた言葉である。

古代から脈々と語り継がれている神話や哲学をはじめ、科学的なアプローチで人間の心と行動に光を当てた心理学、人間の生き方や真理、幸福論などの言葉がちりばめられた自己啓発書、宿命や運命論などとして語られている俗物的な趣のある占いに至るまで、人間の思考や行動、認知を主観的あるいは客観的な理論によって研究されてきた学問に大変興味を抱いている。

デルフォイの神託とはギリシャ神のアポロンが巫女を通して人間にまつわる運命の託宣を告げたと言われている。太古の人々はこれから起こる出来事があらかじめ定められている運命を信じていた。これまでは、宗教が人間のあらゆる問いに光を当てて答えを導いてきたが、神話はそうした説明を神々の物語として表現してきたのだ。

科学の進歩が飛躍を遂げて物質がすべてだという結論に至った唯物論者からすれば、神話や神託、宗教などに対する強い信仰心は一蹴に値するのだろう。しかし、時代を経た現代でも手相やタロット、占星術などの占いや迷信を信じている人は少なくない。

歴史の流れは、こうした神々の存在や不死の魂などを解明しようとした哲学者たちがその時代時代の研究テーマに沿って自然やその営みをさまざまな手法を用いて問いただしてきた。

私が子供の頃、日本でも占いやタロット、占星術等が巷で流行り、ブームになっていた頃がある。書籍や雑誌を買って熱心に読みふけり、今日の星占い、運勢などの吉凶をゲームのようにして楽しんでいたが、これらはエンターテイメント性の高いものであり、今のように真剣に人間の認知や行動に結びつけて考えるということはあまりなかった。

しかし、このようなミスティアスで不思議な世界に興味を抱くようになったのは日々の平凡な暮らしの中で偶然のような一致が何度も続いたからだだった。また、些細な人間関係にまつわる相談から今後のあり方や仕事について占いを通して様々な助言を頂き、これらが現実の生活の中で腑に落ちることがあったからである。こういったシンクロニシティが度々重なり、自分の中で言葉では形容しがたい不思議な出来事が運命や宿命といった真理の道・自然法則とつながっていると考えるようになったのである。

## 汝自身を知れ

私の祖母は戦前生まれで信心深いところがあり、団塊の世代の母とは正反対であった。孫の私は母よりもむしろ祖母と似たような考え方・性格で、不思議な体験をするたびよく

## 汝自身を知れ

祖母にエピソードを話したものだ。

三十年ほど前になるが、祖父が亡くなったとき私は彼の夢を見た。今でも鮮明に覚えているのだが夢の中は白黒の世界で、祖父は平成という時代にそぐわず紋付き袴姿。私は祖父と一緒に展覧会を見に行き絵画や写真を眺めて歩いていた。そのとき、祖父が私に「喉が渴いた」としきりに言っていた。その夢が印象的で何か気にかかったので、私はお線香をあげに祖母に会いに行った。仏壇の前に置かれた遺影に目をやると、紋付き袴姿の祖父の白黒写真がフレームに納められており「夢の中で会ったおじいちゃんだ」と思った。そのことを祖母に話すと「すっかり忘れていたわ」と言っていて慌てて仏壇にお水を供えていた。夢にまつわるエピソードは枚挙にいとまがない。ある知人が夢に現れるとその数日後にその人から実際に電話があったり、音信不通だった人が急に近所に引越してきたり、不思議なシンクロニシティが続いた。ユングが提唱していた偶然の一致が何度も続いたので「これは何かのお告げなのか」と不思議な巡り合わせや因果関係を真剣に考えるようになり、精神分析や精神世界に興味を抱いたのである。

「人間とは何か」「神は存在するのか」などといった普遍的な問いに対して宗教の啓示と信仰、科学の理性と知識は大きな矛盾があるが、重なり合う部分もあるということが提唱されてきた。キリスト教は聖書を通して、自然は感覚や法則を通して一つの真理に至る道があると考えられてきたのだ。

例えば、人間は自然をコントロールすることができない。それは人間が自然の中に神を見出したといっても過言ではない。空には不吉な出来事を予感させるような妖雲が漂い、大きくうねる波、たぎり落ちる急流、つぶての如くほとばしる暴雨。

幸いにも被災は免れたが三・一一東日本大震災を経験した私は、未曾有の自然災害を通して何か啓示のようなものを感じるのだ。地震直後の人々のパニック、原子炉の爆発、鳴り止まない携帯からの警報音、物資の買いだめや海外渡航・脱出のためにパスポートを求める人々の行列を目の当たりにした。

夢にまつわるエピソードをよく話していた祖母の葬儀で顔を合わせた親戚の一人は、震災時、津波に遭遇したと言っていた。足下にさざ波程度の第一波到達後、まもなく大きな波に襲われたそうだ。自分の目の前で津波に飲み込まれて助けを求める者がいたが、板にしがみつき自分の命を守るだけで精一杯だったと。震災後かなりの年月が経過していたが、その人の顔は未だに忘れられないと語っていた。

神は自然と自然法則を通じて奇跡を起こし畏敬の念を抱かせるといふやり方で我々人間に真理の道を解き明かすという考え方があった。つまり「汝自身を知れ」という言葉にあるように人間は決して神にはなれない、分を知れということである。このように古代ギリ

## 汝自身を知れ

シャ時代から現代に至るまで人間は運命や宿命に翻弄され、それにまつわる悲劇や喜劇が繰り返されてきた。それは一人の人間の人生だけでなく国や世界の成り行きも運命づけられていると考えられてきたのだ。今、我々は地球人として日本のみならず世界中に引き起こされている気候変動や自然災害を通して神からの訓示を受け入れなければならぬ時節なのだろう。

### 運命の車輪

私たちはこの世に生を受けた瞬間から人生という浮き世の荒波を超えて行かなければならない。もし運命が定められているのなら、なぜ生まれてくる必要があるのだろうか、なぜ幸せな人と不幸な人がいるのだろうかと思う。出自によって経済的に豊かで富む者もいれば、貧困に喘ぐ人もいる。世の中には不条理が蔓延しているのだ。

例えば、経済的に恵まれた環境で育った人たちは簡単に物が手に入る。何でも親が物資を与えてくれて何不自由ない暮らし。世間的に言えばお金があることで贅沢な暮らしができるし将来の心配も少ない。お金は人生のパロメーターになることは否めないが、お金のえあれば本当に幸せなのだろうか。

幸せになるには幸せになるやり方を学ぶ。幸福を楽しむ。幸せとは楽しみであり能力でもあるのだ。他人から与えられるものではなく自らが味わおうとして行動し、学びを通して楽しみを発見する能力なのかも知れない。しかし、幸福を味わうには苦勞が伴う。運命の車輪は人間の思考と想像力によって不安や期待、ときには苦痛や挫折を味わったりしながら目の前にそびえ立つ大きな山の山頂を一步一步目指すようなものだ。

つまり本当の幸せとは、人生という荒波や学びの中で努力や挫折を繰り返しながら充足感や生きがいを感じることであり、幸も不幸も自らの心の中にある意志の力で突き動かされているようなものだと思える。

例えば、肥大し過ぎた想像力は必要以上に不安をかき立て、緊張や動揺をたえず自らに与えるパンドラの箱のようなもので自分を解放することが肝要だ。先に述べた震災や過去のトラウマ、自分が不幸だと苦しむ人があるのは、肥大し過ぎた想像力や幸福を味わう苦勞や挫折が足りないのかも知れない。

その一方で想像力は、知覚や思考を通して自分の理解を超えた場所、つまり彫刻や絵画、音楽、文学的な才能を開花させてくれるインスピレーションなのだととらえている。このように運命の車輪は左右どちらに傾くかによって未来を大きく変えてしまう危ういものである。

## 無意識の扉

自らの内にある意志の力が人間の幸不幸を定めているとするなら、深層心理や精神分析は人間の本能や心を解明する一助になり得るだろう。たいていの人間は環境や本能、欲望などと対峙しながら緊張関係にある。常に選択を迫られ、葛藤を抱えながら生きているのだ。

人間は成長とともに本能をコントロールしながら現実の環境に対応するため自我を形成していく。そして社会生活の中で培われた道徳観や善意、良心は超自我として働き、罪や葛藤、自我と向き合っつてぶつかり合い、抑圧された耐えがたい願望や欲望は無意識の扉をノックしているのだ。

幸せに生きるヒントは、自分が想像する以上に物事を深刻にとらえない、悪く考えないことなのかも知れない。想像上の不幸の産物は理性を失わせ、心の平衡感覚を狂わす。悲しみを忘却の彼方へ葬り去ることができず、不幸を点検ばかりし、無意識という閉ざされた不幸の扉をノックし続けている状態なのだ。

## 幸せになる処方箋

前述したように思考と想像力といった意志の力が人間の幸不幸を定めているとするならば、自分の考え方や癖を直せば幸せになれるのだろうか。トラウマや因果律は現実問題として目の前にはばかり、それに立ち向かうことが必要だ。コンプレックスや劣等感なども人を不幸にさせる要因の一つだ。

私たちは不条理で矛盾に満ちた世界の住人だ。現実を見渡せば世の中は不平等であり、差別や貧困、戦争などが私たちを取り巻いている。

しかし、世の中に起こることに偶然はなく、自分が成長し、幸せになるために必ず必然なのだ――全知全能の神は天界から人間の行動を把握し、私たちは神の御手の掌の中で見守られている。ときには転がされて擦り傷を作ったり、大きな痛手を負ったりするが、慈愛に満ちた世界の中で試されているのだろう。

「汝自身を知れ」という言葉にあるように自分自身を深く見つめ直し、幸福の扉をノックしたいものである。